

14. ハムスター舌粘膜におけるGap junction蛋白 connexinの発現について(一般講演)(東日本歯学会 第12回学術大会(平成6年度総会))

著者名(日)	齊藤 正人, 越智 眞理, 中畑 潜, 定岡 敏之, 神田 昌巳, 芳賀 宏, 長江 俊一, 安彦 善裕, 賀来 亨
雑誌名	東日本歯学雑誌
巻	13
号	1
ページ	156
発行年	1994-06-30
URL	http://id.nii.ac.jp/1145/00007954/

齢とともに面積が小さく、上皮の菲薄化傾向を示したが、はっきりした相関は認められなかった。4) 悪性腫瘍症例36例のうち、舌乳頭の消失傾向すなわち平坦化28症例、萎縮8例と平坦化が多い傾向が見られた。5) 悪性腫瘍症例では貧血の程度が非悪性腫瘍症例に比べ強かった。ま

た平均Hb量、Ht値も同様の傾向が認められ、舌乳頭の消失と関連する結果と思われる。6) 平坦化症例の面積を悪性腫瘍症例と非悪性腫瘍症例とで比較すると非悪性腫瘍症例のほうが小さい傾向を認めたが、有意差はなかった。

14. ハムスター舌粘膜におけるGapjunction蛋白connexinの発現について

齊藤 正人, 越智 真理, 中畑 潜
定岡 敏之, 神田 昌巳, 芳賀 宏
長江 俊一, 安彦 善裕, 賀来 亨
(口腔病理学)

目的: ギャップ結合は細胞間結合装置の一つで、分子量約1000以下の物質の細胞間における交換、すなわち細胞間コミュニケーションに関与しており、多細胞生物における増殖、分化やホメオスタシスの維持に重要な役割を担っていると考えられているギャップ結合はコネクシンと呼ばれる蛋白質から構成されており、現在まで10種類以上の異なったコネクシンcDNAがクローニングされている。

口腔粘膜重層偏平上皮は基底層から角化層への調和のとれた分化をすることで、その恒常性を維持しているが、分化に伴いギャップ結合の出現数に違いがあることが指摘されている。本研究では正常舌粘膜上皮において、どのようなコネクシンが発現しているか、また上皮の分化過程においてその発現がどのように変化するかを検索した。

方法: mRNAレベルでの検索のために正常ハムスター

舌粘膜上皮を用い、Cx26, Cx32, Cx43のRNAプローブにてノーザンプロットを行った。免疫組織学的検索はCx26, Cx32, Cx43の抗体を用いてその局在様式の観察を行った。

結果・考察: ノーザンプロットによりCx26, Cx43のmRNAの発現は認められたが、Cx32は確認されなかった。免疫組織化学的検索では、Cx26, Cx43は舌粘膜上皮細胞の細胞膜上に輝点として認められたが、Cx32はみられなかった。その局在はCx26は顆粒層と有棘層の上層に、Cx43は基底層と有棘層の下層に局在することが確認された。またCx26からCx43へ局在が分かれる部分で、同一細胞内にCx26, Cx43が両方発現していることが確認された。以上の所見により、ハムスター舌粘膜上皮にはCx26とCx43が存在し、その分化過程においてCx43からCx26へ発現が変化することが示唆された。

15. チタン表面における歯肉由来線維芽細胞の遊走と酵素活性について

蔵口 潤, 齊藤正人, 三科卓見
長江俊一, 高橋香苗, 芳賀 宏
中畑 潜, 定岡敏之, 神田昌巳
安彦善裕, 賀来 亨
(口腔病理学)

細胞の接着、遊走について、これまで主にfibronectinや種々のコラーゲンをはじめとする細胞外基質に着目した報告が数多くなされてきている。近年この細胞外基質だけでなく、これらを分解する酵素の関与が、特に癌の浸潤、転移という観点から注目されている。一方、歯科インプラントにおける細胞レベルでの研究は、細胞の

接着と遊走がその予後を左右する因子の一つとして多くの報告がある。今回われわれは、インプラント材として広く用いられているチタン基質上で線維芽細胞を培養し、血小板由来成長因子(PDGF)による遊走と酵素活性について検討した。

方法: 細胞はBrunetteらの方法により歯肉より単離し